

小田実全仕事

ODA — 1
MAKOTO

明後日の手記 / わが人生の時

小田実全仕事

ODA
MAKOTO

1

明後日の手記/わが人生の時

小田実全仕事

ODA
MAKOTO 1

明後日の手記/わが人生の時

昭和45年6月30日 初版発行
昭和53年2月25日 再版発行
定価は帯を御覧下さい

著 者 小田 実
発行者 佐藤皓三
発行所 河出書房新社
東京都新宿区住吉町 95
電話・営業 03 (355) 5311
編集 (355) 5321
振替東京 0—10802
暁印刷・小高製本

© 1970

小田実全仕事1

明後日の手記 5

わが人生の時 93

この巻のための
きわめて短かい注釈 409

解説 真継伸彦 411

装帧 飯島啓司

小田実全仕事 1

明^あ
後^ご
日^に
の
手^し
記^き

私はもはや明日すら信ずることは出来ない。
強いて信ずるとすれば《明後日》を信ずる他はないのだ。
あきつて

I sat upon the shore
Fishing, with the arid plain behind me
Shall I at least set my lands in order?
London Bridge is falling down falling down falling down
T. S. Eliot *The Waste Land*

第一部 神の黄昏

進すすみなく続く映画のようであった。

黝くろんだ薄鼠色の画面が突然明るくなったり暗くなったりしながらぼくの網膜を流れた。時にはその流れは静止し、画面の背後でうごめく火のようなものがぼくの閉じた両眼を射るように燃え上った。火は次第に燃え拡がった。その火に周囲は一層暗く、闇は不気味に慄おそえた。火は燃え拡がりながら、静止しているもののようであった。——高速度撮影の一駒を見るように大きな火焰をかかげたままぐったりとしていた。そのまま火はぼくの両眼一ぱいに拡がり、冷い火焰が顔をおおった。火焰の中で黒い建築物が次々に崩れ落ちて行くのが見えた。それはちょうど火災のセット撮影のように呆気なく崩れ落ち、その度ごとに新しい火焰を加えるのであった。そしてその大きな火はじっと動かなかった。

かすかに何かが認められた。薄ぼんやりした暗い何かが、うずまき、重なり合って徐々に近づき、次第に輪郭を形成して行つた。虚無の底から羽搏く怪鳥のように、それは大きく翼を拡げた。その感触がぼくの鼓動をあやしく速めた。突然、火の流れは止んだ——顔だった。いくつかの薄ぼんやり

した顔がオーバーラップしながら暗い網膜の底一面に拡がった。捉えどころのない影像が重なり合いつつ次第に一つにまとまろうとして、しばらく小刻みにふるえた。それがやがて静止に近づくにつれて、暗い背景に蒼白い一つの像が浮び上った。

母の顔だった。もう画面は動かなかった。何かに憑かれたように、何かを求めるように母の顔は蒼白くぼくをみつめた。その母の顔をぼくはどこかで見たことがあるのだ。暗い物置の片隅で、母はよくそんな顔つきをして佇たたずっていたのだ。ぼくはその時、雛祭の道具の箱や古びた鳩時計などが雑然と積み重ねられた一隅のほこりっぽい空間に坐まって、奇妙に大きい眼玉の少女たちが描かれてある薄汚れた絵本を拡げていたのだった。それは絵本ではなかったのかも知れぬ——くすんだ色の新聞紙に混まって色褪せた極彩色の大型の書物が五月人形のかげに、散在さんざいしていたが、その中の一冊だったのだろうか？ 大型のメルヘンの挿絵だけをめくっていったのかも知れない。ぼくは姉と争まがった後では、きまぐれこへ入り込むのだった。そんなぼくを少したつと母はいつも、そっと忍しのび足で入いって来て静かに抱き上げて連れ戻すのだった。ぼくはそうして貰もらいたいためにそこへいつも入り込んでいたのだらう。だがその日はいつもと違っていた。母はそつと細目に扉を押して開いて入いって来たが、ぼくの頭髪を優しく愛撫する代りに、そのまま背後にじつと佇たたずんでいた。ぼくは母の水色のワンピースを横眼でちらと見ながらわざと素知らぬ顔で本に見入っていた。大きな眼玉の姫君が、涙をたたえ

て棺の中から王子に懇願していた。その何かに憑かれたような媚を含んだ大きな両眼には描ないかき方で涙が描かれてあるのだった。ぼくはたまらなくなつて振り返つた。かすかな西陽が埃りっぽい空気を通して彫りの深い母の顔に深い陰影をつくつていた。母は泣いているのだった。今しがた絵本の中に見た涙を、ぼくは不思議なものを見るように母の眼に認めていた。母の大きな両眼にも涙は宿り、母はそのまま窓の方へ視線を向けているのだった。その蒼白い母の横顔と、今見たばかりの奇妙な絵が、ぼくの稚い意識の下で重なり合ひ、ちょうど自分たちが棺の底にいるかのように感じたのだろうか、ぼくもまた突然泣き伏したのだった。母の水色のワンピースと、射し込む西陽に映し出された埃が、奇妙な対照をつくつてしばらくは意識の底で母と絵の周りをぐるぐる点滅しながらうずまいた。……そのときの追憶が次々に網膜の画面に浮び上り母の顔に重なり合つて行つた。蒼白いその画像は期待にふるえるように小刻みに動いた。それは死人の眼だった。棺の底からもう一度、生と愛を願う姫君の眼だった。けれどもそのまま母の顔は変貌を重ねて行つた。別の新しい画像が背後から重なり合つて映し出されるように、その眼が凹み始め、次第に一本の太い皺と無数の細かい皺が額に浮きで、鼻が奇妙にゆがんで見えた。すでに母の顔ではなかった。ぼくはこの顔を、何時、何処で見たのだろうか？ そう、いつ、どこで？ 突然ぼくは想い出す。

——Comment allez-vous? Comment allez-vous?

あの老婆の顔だった。突出してゆがんだ鼻、眼脂のたまっ

た輝きの喪失^{しな}れた眼、虚ろなそれでいてどこかずるような表情、無数の皺に刻みこまれた悔恨と無恥、昔は美しかったかも知れぬこの顔——同じように何かに憑かれたように、何かを求めるようにふるえ動くあわたましい顫^{ふる}動きの。

父に連れられてぼくは歩いてた。薄明の異国の不思議な情景がぼくの小さな頭脳の動きをほとんど停止させ、恐怖と好奇の混乱の中で、ぼくは一方の手を父に、一方の手を姉に托して自分をわずかに支えていたのだった。ぼくはほとんど記憶していない。妙にゆつたりしたサイレンの響きと、すでに明け始めた橋上の情景の他は——父は例のごとく黙りこくつて、自分だけの瞑想にでも耽りながら、ぼくの手を乱暴に引っぱっていたのかも知れぬ。ぼくはまたぼくで父のあの暴風のような愛情の表現を恐れながら、——それは何時でもぼくを苦しめ怖しがらせたものだが——けれども一方ではこの異国の喧噪の中ではたまらなく心細く感じて、ぼくの手を父のそれにいよいよやながらしつかりと結びつけていたのだった。上海は不思議な都会だった。始めて見た異国の風景、絵本の世界の住人たちの総登場、——曇った冬空を背景に寒々とした登場——ぼくは不安にふるえながら歩いていた。父と姉の間でわずかに自分を支えて——。

ぼくらはいつのまにかフランス租界のあたりまで来ていた。フランス——ぼくはあの匂いと共に想い出す、いつも小さい、いろいろなものを象つたお菓子を呉れた尼さんと共に。その頃、近所にその尼さんたちは住んでいたのだ。彼女たちにはふしぎな香りがあった——それは香料の匂いだった

のだらうか——甘い何とも言えない匂い。お菓子^{お菓子}の甘さと共に体にしみ渡るようなその甘さ——それがぼくのフランスだった。

けれどそのフランスは異った形で表われた。醜い腰の曲った老婆の形で——（何という寒々とした登場）ぼくらは突然呼び止められた。しわがれた、

—— Monsieur ! Bon jour, Monsieur !

という叫びで。それきり老婆は何も言わなかった。

—— Comment allez-vous ? Comment allez-vous ?

のリフレインの他は。

それは何とも形容し難い声だった。それはちょうど、夜寝静まった頃に遠くからひびいて来る屋台の支那蕎麦屋の笛の音に似ていた。単調ではあるが人を刺すような悲しみに満ちたリフレインであった。ぼくはそれを怖がりいつも寢床の中で眠られない眼を無理に閉じようと試みるのだった。老婆は何か玩具を売っていた。突然、老婆は口をつぐんだ。ヴァイオリンの絃がアレグロの急調と共に切断了ような不気味な沈黙があたりを占めた。老婆は顔をあげてじっと父を見た——その眼をぼくは忘れることが出来ぬ——眼脂だらけの眼がじっと父をみつめているのだった。あたかも何かを憐むように——。老婆は口の中で何かぶつぶつやきながら、突然口を開いてニッと笑った。歯がほとんど無い口腔の内部では舌が不活潑に動いていた。中国人離れのした、けれどやはり中国的なその横顔——襦袢と垢に埋れた中背の屈曲した体、——老婆はどここの国の人間なのだろうか。いつのまにか

老婆はぼくを見下していた。その表情に嘲けりの色があったようだ。ぼくは父の手を堅く握りしめ、それを大きくゆり動かした。思わず立ち止っていた父もそれに気づいたように歩き出した。ぼくと姉はひきずられるようにそれに続いた。それからぼくはどう歩いたのか？ ぼくはどうしても想い出すことが出来ない。

ただぼくは次のことを想い出す。少したってからの——おそらく半年位後のことだったろう。大阪の自宅で父はある日、突然このことを言い出したのだった。

—— 英夫、あれは混血児だよ。混血児は変だな、さしずめ混血婆だよ。

父はそう言いながら豪放に笑うのだった——父の膝の上でふるえているぼくの頭髪を荒々しく愛撫しながら。母は遠慮深く微笑した。いつもの母のどこか高貴な微笑とちがって——どこかずるそうな——そう、あの老婆の薄笑いを浮べるのだった。よみがえって来た半年前の重苦しい記憶が、この夏の真昼にあの上海の寒々とした空気を吹きおくるのだった。だが、それにもまして、新しい衝動がぼくの腹の下部の方からわき上って来るように感じた。むしろ本能的な素早さでそれはぼくの全身を駆けめぐった。

—— 一体混血って何だろう？ ——

混血・コンケツ……。——何か秘密の扉を、偷楽の扉を押し開くような快感がぼくを襲った。それはその頃、ぼくが知り始めたケツコンということばに語呂が通じていた。ぼくの本能は何故か素早くその二つを結びつけ、暗黙のうちにその

二つが通じ合うように感じた。ぼくはそれをくり返しつづやいた。ケッコン・コンケツ、ケッコン・コンケツ…… けれどもぼくは何もたずねようとしなかった。始めて羞恥の感情がぼくを襲い、ぼくの全身をむしろ快よくしびれさせた。後でぼくはそつと姉にたずねるのだった。——コンケツって何のこと？ 姉は嘲けるようにこともなげに答えるのだった。——馬鹿やな、混血いうたら血の混じることや——

——一体どうして人の血が混り合うのだろうか？

ぼくの全身をまたもや新しい戦慄が襲った。どこで？ どうして？ そしていつ？——明日にでも医者は血を混ぜるために家にやって来るのだろうか？ まぜられた人間はあの老婆のように——*Comment allez-vous?* をくり返すのであろうか？ みなあのように醜く老いぼれてしまうのだろうか？ けれどもその疑問は全くくつがえされた。

——清子さんかつて、みんな混血児や言うてはるし——

姉はこともなげに言うのだった。姉の通っていたミッシェンの小学校には——その幼稚園にぼくはいたのだが——混血児が多かったのだった——そして清子さんは姉の友達だった。眼の大きな色の白い神経質そうなやせた少女だった。ひそかにぼくが女王のように、或いは姫君のようにあがめていたこの少女が混血児だって？——ぼくのあたまたにあのリフレインが繰り返される。

——ケッコン・コンケツ、ケッコン・コンケツ……

何か甘い陶酔の中で繰り返すのだった。そのぼくを姉はいつも嘲けるようなまなざしで見つめていた。ぼくは、動物的

な憐れみの表情をさえその醜い歪んだ微笑に感じたのだ。涯しなく続く映画のようであった。

——その姉の顔がそのまま次第に大きくなり、画面に大きくクローズ・アップして迫って来た。けれどもこのぶくぶくふくらんだ姉の顔は、どこかあのほっそりした清子さんの顔のようでもあった。しばらくそうして薄ぼんやりした画面が流れていた。背景に淡く闇を溶かしこみ、小刻みに上下動しながら、まるで涯しがないもののように続いていた。それはまた母の顔のようでもあった。あの死んだ顔つきでもあった。或いは昼間見たフオクナアの短篇集の表紙の女のようにもあった。やがてその女の顔が細長く伸び、いつのまにか清子さんの顔に変わっていた。すべての顔が死面だった。けれどもの不気味なシヨパンの手の石膏像のようにそれでいて生きているのだった。全てが奇妙な微笑を浮べて、ぼくを嘲笑するように捉え難くゆっくり動いていた。けれども突然その動きは止まった。それは一人の少女の顔だった。ボール紙の冠をかぶった蒼白い少女の顔だった。

——お前、あいつに惚れてるんだろ——

醜い声がどこからか聞えて来た。

——お前、あいつに惚れてるんだろ——

それはもう遠い昔のことではなかった。わずかに三月前の学校の演劇会の時——あの古びた木造の講堂の黒いカーテンで真暗にされた一隅のことではなかったか？ あのと看、ぼくは友達群から離れて急造の照明台の上に登り一心に舞台をみつめていたのだった。彼女は金粉をちりばめたボール紙

の王冠をかぶって舞台の中央に一人坐っていた。スポット・ライトのやわらかな光線がその金粉を輝かし、彼女の全身を浮き立たせていた。彼女はそれを意識したかのようにしずかに頭を動かし、水色のドレスだった。彼女のやせ細った体がその光の下でむしろきこなく見えた。細い腕が、あやしく蛇のようにまだ十分発達しきらない胸をゆれ動いた。ぼくの眼は激しく息づきながらそれを追っていた。何かの章話劇的一幕だった。森の妖精たちはまだ眠っていた。彼女ひとりが起き、彼女ひとりがみつめていた。誰を？——

面白くねえ——

またしわがれた声があった。紺野がいつのまにかぼくの傍に付っていた。そのことはぼくの呼吸を止めた。そのことは醜い反響がぼくの全身から全ての力をしほり取るように起った。ぼくはしびれるような恥かしさと——それは昔、甘い陶酔のリフレインの中で味ったものではなかったか——怒りにふるえた眼で虚空をみつめた。ライトのやわらかな光が何かこの場にそぐわないもののようにはぼくの眼に映じた。

パン君——

カタパン？ カタパン！——何という嘲けりのこもったことばだろう。ぼくはカタパンじゃない。それに……—「ぼくは上原園子を愛している。やせ細った骨でぎしぎしときしむような少女——（どうだ、あいつもなかなか見られるじゃないか）——冠をかむった少女よ！ ぼくは「あいつ」

を眼の前にして罪を犯そうとしている。ぼくは「あいつ」を愛している。けれど、いやそれにもまして、ぼくは本当は好色漢なのだ。「あいつ」をぼくの欲情にとがった歯にかけて、「あいつ」の体液を味おうというのだ。誰にも知られずに欲情の炎を燃やしつづけている——堅いパンの外殻の内部で醜態を続けているこの秘密のよろこび——ぼくは本当は好色漢ではないのか？

破廉恥な罪の想像がぼくの全身をしびれさせた。それはよろこびであった。一つの大きな戦慄を伴った歓喜の叫びであった。

O! Great Sinner!

叫びは反覆され、そのリフレインの中でかつての幼い日の自分と現在の自分とが醜く重なり合って映った。甘さの中で顔を火照らせ、何かを待ちもっている姿勢を——苦惱と歓喜の交錯の中で罪を犯そうとする眼を——ぼくははっきり認めていた——何か貴重なものを一刻一刻失って行く自分を——失うことにむしろ歓喜を覚えている自分を——。

O! Great Sinner!

渾しなく続く映画のようであった。

少女の像は極度にゆがめられ、彼女もまたこのよろこびに浸っているかのように見えた。そのゆがみが更にむしろ醜態なまでに長くのび上ったとき、薄ぼんやりした意識の中で、ぼくは——いや、彼女自身が叫びつづけていた。

——犯せ！

画面は急に動き始めた。暗い無限に続く映画であった。彼

女の像をあゝ醜い顔が勝利の叫びをあげて侵して行った。それは紺野の脂ぎった顔でもあり、ぼく自身の欲情に濡れた表情でもあった。その皺は老婆のそれでもあり、姉のその笑いも傲慢な微笑でもあった。それらは一様に小刻みに動いた。

ふるえながらまた一つの像に集って行った。朧ろげな輪郭が、かすかにふるえる幾本かの線が一本の線に集り、背後の闇は更に深くなった。それはまた母の顔であった。悔恨に打ちひしがれた——けれどどこかに欲情をとどめた顔であった。口にはあの奇妙な薄笑いを浮べて、母は何かをぼくに語っているようであった。暗い懺悔室の内部で、卑しいことばを、冒瀆に満ちた言葉をぼくにささやくようであった。

画面は更に動きを速めた。いくつかの影像が現われては消え、いくつかの叫びが断続してつづいた。次第に画面は暗く、やがてはただ焰の影のようなものを残しながら、影像は一つ一つ消えて行った。

——溶暗。

ぼくはつかれきった意識の中でなおなにかを求め、何かを待ちつづけた。画面は次第に薄れて行った。

何か物憂い響きが、地の底から響いて来るようであった。ゆっくりとしたそのリフラインが、ぼくにまだ夢を見つづけているような錯覚を与えた。それは波の音であった。次第に意識がめざめて行くにつれて、その響きもまた、現実味を帯びた沖絃質なさざめきに変った。いつのまにかもう朝が来ているのだった。ぼくはしばらく体をかたくしたまま動かないで

いた、両眼を閉じて。まだなにか幻影を求めるかのようにその波のひびきに聞き入っていた。薄明るい光が両眼一ぱいに拡がり、夢の終結を告げていた。けれどそれはまた新しい映画の開幕のベルでもあった。そのベルは湿気を含んだ壁の向うから低く陰気にひびいた。それは弱々しい断続する母の咳であった。もうぼくははっきりめざめていた。

ぼくは眼を開いた。暗灰色の空が、時の流れを堰き止めてしまふかのように、白く凍った窓一面に拡がり、時には冷い風を吹き降した。所々傷痕のように穴をあけた襖、汚れたすりきれてしまった畳、そして妙に明るいい色彩の注射箱。

母の咳はまだ続いていた。ちょうど、過去のものを一つずつ振り離して行くように、或る時は強く、或る時にはほとんど聞えなかった。それが海のひびきに和して奇妙な階律になった。ぼくはやつと起き上った。何時だろう、寢床に横たわったまま、やせさらばえた腕をくんで母は窓から空を見上げているのだろう。すき通るような皮膚の色がむしろここでは唯一の生氣あるものだ、——何を考えているのだろう——そして何時母の幻想は終りを告げるのだろうか？ 華やかな舞踏会の場面で、熱烈に抱擁を続ける二人の愛撫で、或いは雪の上にひざまずく哀れな少女の姿で、それとも神に懺悔する老いたる牧師の言葉で母の映画は終りを告げるのだろうか？

流れるような画面が次第に暗くなり、画像が何か一歩一歩永遠の方へ波うつように遠ざかりながら、突然——本当に突然——太い三つの文字が記録される。

《END》そして《FIN》と——

もうお終いなのです——

もうお終いなさ——

観客は誰一人もはや画面をふり返るものもなく、忘れていた用事を思い出したかのようにいち早く座席をたつて行く——そう、一刻でも早くこの幻想の場面から逃れようとして、外気の中で自分の存在を確かめようとして、友の名を呼び、恋人の腕をとって外へ出ようとする——むしろ何でもなかった顔つきで他愛ない話に打ち興じながら。今さっきまで主人公の運命に涙を流した女は——いいえ、何でもないんだわ——と自分に言い聞かせながら素早く涙をふいて笑顔を見せる。男は敵役に対する憤りをかくすように、妻に笑顔で答えてみせる。——ねえ、今晚はパウリスタにしない——彼らはこんなことを言い合いながら腕をくんで出て行くのだ。たがいの心の内部でちぐはぐな感情を持て余しながら、強いて冷静な表情で——。

こうして映画は忘れ去られる。人たちの心の中で、幻想の画面は次々に薄れ消え去って行く。後に何が残るだろうか？ まして誰があの象徴的な三文字「END」「FIN」を覚えていたのだろうか？ 明るい現実のイルミネーションの下で、すべてが忘れ去られた後に、ただ次のようなことばのみが残されているのではあるまいか？

——ああ、あれね、あれは「面白かったよ」

——いいや、「つまらなかったぜ」

その漠然とした価値判断が墓碑銘のようにきざまれ、次の世代へと伝えられる。30年の後に、誰があの映画の最後の場

面——それが立派で印象的なものである外は——例えば高僧の厳かな死とか、詩人の詩的な最期とかの外は——を覚えている人があるだろうか？ ましてあの三つの文字を——。

それは突然やって来る。ある程度の前触れは予見し得ても、その文字の現われる瞬間を誰が正確に予見することが出来るだろうか？

もう母のそれが迫っているのではないか？ もう観客席の間からさえも早く終らないかという声が起って来ているのではないか——人々はもう座席から立ち上ろうとしているのではないか。《つまらなかった》というささやきを残して。

ぼくは突然ギリと我に返った。母はいつのまにか向き直って枕もとでぼくをみつめていた。——あの夢の中の顔、蒼白な打ちひしがれた、けれどどこかに欲情をとどめた顔であった。それはまた、冠の少女の顔ではないか。《似ている》——そのことばは天啓のようにぼくの全身をやわらかく包んだ。ただそれのみがあたかも暗い世界からの唯一の抜け道であるかのように、ぼくの姿勢はその方へ崩れ落ちて行った。

——英夫さん、神さまは今どうしていらっしゃるのです？
うね？

それは予期しない奇妙なことばだった。母はただそれだけ口ごもりながら低い声で、まるで友達か何かのことを噂するように、この予言者じみたことをつぶやいたのだった。その響きの中で何かがガラガラと音をたてて崩れ落ちて行くようであった。足もとの砂が次第に崩れ始める——一粒一粒の砂の構成がゆるみ、いつのまにか全体が滑り始める——そんな

な瞬間に自分が付ったのを感じた。ぼくが今しがた得た小さな安堵はその流れにおし流され、意識のくらがりの向うで粉になろうとしていた。

どうしたと言うのだろうか？ 母は何故こんなことを、言い出したのだろうか？ けれどぼくには、母の言いたいことが判るような気がする。もしかしたら、母は田原さんのことを言っているのかも知れない。もしかしたら、あの田原のことを言おうとしているのではないか？ 田原一氏のことを、姉の夫である田原牧師のことを――。

あれ以来、母は神を見失ってしまったのではなからうか？――ぼくにはそんな感じがする。母の《神》は永久に母をすてたのではないかと――。

いくつかの断片が流れ始めた。

それは、神の僕の敬虔な祈りの表情でもあり、熱烈に行動を説く彼のプロフィールでもあり、あるいは見なれた姉の夫の世帯じみたボトレエトであった。どこかそれは姉に似ていた。傲慢な微笑を浮べてぼくと母とをみているようであった。そして、その田原は姉と共に、永久に母を残したまま立ち去ってしまったのだ。どこへ？ おそらく母の今まで知らなかった、また永久にこれからも知ることのない《新しい世界》へ――姉と共に――そして母とぼくをのこして――。

――それにしても一体「神」はどこに行ってしまったのだろうか？ 「神」はもうどこにもいないのではないか。幼いとき、日曜学校のベンチの上で、或いは田原さんの膝の上できいたやさしい《神さま》はもうどこにもいない

のではないか？

――あなたはどこへいかれたのか？ 知らぬ間に、形を変えてしまわれたのか？

――どこにも、天国にさえ、「神」はいないのではないか？

――いやその天国もまたぼくらの知らない間に、《新しい世界》へ移ってしまったのだろうか？

みんな変わってしまった。田原さんも姉も母もそしてぼく自身も――いつのまにか《新しい世界》が創造され、《新しい神》がつくられたのだろうか？

ぼくには判らない。少しも判っていない。あれ以来――《あれ以来》――ぼくには何一つ判っていない。みんなはうまく事柄を説明してすませている。大人たちはみんなそうなのではないか。理窟と経験できれいに物事を割りきってみせる。けれどぼくは大人ではない。ぼくはただあらゆるものを本能で感ずるのだ。ちょうど犬か何ぞのように、鼻をならし、異った風向に耳をたてるのだ。たしかに別の匂いが、別の風が――おそらくは《新しい》何かが――ぼくと《神》の間に入りこんで来たのではないか？

ひさしく待ちにし メシヤよくだりて

みたみのなわめを ときはなちたまえ

主よ主よきたりて みすくいをたまえ

あれは暗い会堂の内部であった。まだ幼稚園に通っていたぼくの横に、母は手をくんで坐っていた。始めて入った会堂の冷んやりとした空気に圧倒されてしまったかのように、ぼくは《二葉幼稚園》の字の入った水兵帽をぐるぐるまわして